

「恋愛って難しいよね」

私の名前は早瀬夏。四年大学に通う一年生。今、恋愛について女友達三人と話していたところである。私は今まで付き合ったことがない。好きになったことはあるが、振られるか、好きな人に彼女が出来たとか苦い経験しか記憶にない。

「おはよ。その話くわしく聞かせてよ」

というように今は女友達という方が断然楽しい。

でも、心の中では彼氏欲しいなとか考えているけれど、以前振られてからいつそう臆病になってしまった。今の時代は草食系？ とか言うのかもしれないが、自分で言うのも何だけど私は草食系女子だと思いうことが時々ある。そんな私に運命を感じACるような恋愛が始まるうとはこの時は考えてもいなかった。

「いつてきます」

私はいつも通り学校に行っていると、

「早瀬だよな？」

駅に向かおうと歩いていると後ろから肩をたたかれたのである。後ろを振り返ると黒髪の短髪で雑誌に載っているような服を上手に着こなしている男性が立っていたのである。

「えっ……、ど、どうも」

私はあまりの爽やかさにドキドキしてしまっておどおどしていた。

「俺の事……覚えてる？」

そう爽やかな男性は聞いてくるが全く身に覚えがない。だから失礼を承知で、

「すみません、誰ですか？」

と聞くと、

「一だよ。中学一緒だった」

なんと中学の時同じクラスだった山垣一君だったのである。中学校の時は背が小さく坊主だったのでおにぎりせんべいにしか見えなかったのに全く別人になっていた。

普段あまり男性とは話さないので、初めは緊張したが久しぶりの再会のせいか話が盛り上がり駅に着くまでずっと話していた。その日の夜は朝のことが忘れられなくて全く眠れなかった。まだこの時はこの気持ちが恋だと気付いていなかった。

久しぶりの再会のせいからよく山垣くんと会う回数が増えてきた。普段男性と話とほとんど話

すことがなかった自分が楽しそうに、しかも自分から話を振っていたりしている自分に、夏自身が一番驚いていた。会う回数が増えていくたびに私の心のドキドキは止まることを知らなかった。心のもやもやがどんどん大きく、深くなる私はついに大学の友達に相談してみることにした。

「……っっていうこと何だけど、これってどういうことだと思っ……？」

友達はみんな口をそろえて、

「恋に決まってるじゃん」

となぜか嬉しそうに言われた。

今まで恋をしてきたことはあるが、これまでとは違う心のドキドキに私は友達に相談前はもやもやしていたものが、恋だと分かるとすごくわくわくしてきた。だが、この後私に大きな悲しみがのしかかってくるのである。

恋だと分かってからの私は顔の筋肉が緩みっぱなしで友達からは苦笑いされる日が続いていた。ある日の帰り、私は駅を出て家に帰ろうとしたら、前の方に山垣君の後ろ姿が見えた。私は帰りに彼を見るのは初めてだったので勇気を出して声をかけようとしたが、横には背が低くてかわいらしい女の子と一緒に歩いていた。へたれな私は電柱の影から二人の様子を見続けていると二人は店の中へと姿を消してしまった。その日の夜私は帰りにみた光景が忘れられず中々眠りにつくことが出来なかった。

次の日私は大学に向かってしていると、

「おはよう、夏」

と一番最仲の良い春奈に会った。私は挨拶を返し再び歩き始めると、

「今日元気ないね。どうしたの」

と気遣ってくれた。私は思い切って昨日の事を話してみることにした。話し終えると春奈は、

「夏って山垣の事が好きだったんだ」

と意外な返事が返ってきた。

「あれ、言っただけだったっけ？」

「うん、今初めて聞いた」

私は話していたとばかり思い込んでいた為すごく恥ずかしかったが、春奈に、

「で、どう思う？」

と再び聞き返した。

「噂でだけ高校の時彼女がいたとは聞いたことがあるけどな」
私はそれを聞いた途端、

「やっぱり……」

とどこか自分で納得させた。

「なんで私が好きになった人は彼女がいるのだろう」

「本当かどうか分からないのもうあきらめちゃうの？」

「だって彼女いたら勝ち目ないし」

すると春奈は一つ溜息を吐いて、

「夏っていつもそうだよね。自分にマイナスな事が起こるとすぐに逃げてばかり。私、夏のそういう性格ほんとむかつく。そりゃ彼氏欲しいとか言っても無理だわ」

私はこの言葉を聞いて頭に血が昇り言い返そうと思ったが、それと同意に冷静に考え直してみると、春奈が言った通り私は友達に応援してもらっても何事にもあきらめがちだった。春奈がつんと言われなかったら私はまた一つ簡単にあきらめてしまうところだった。

「ありがとう、春奈。おかげで今回は頑張ろうと思う」

「いやいや、こちらこそごめん。つかつかとなっちゃって」

私はこの日友達のありがたさを改めて知った。

あれから二日経ち、久々に山垣君と会った。私はこの日のために何度も練習した事を今日実行する。

「おはよう。早瀬」

「おはよう、山垣君。一つ聞きたいことがあるんだけどいいかな？」

「おう、どうした？」

私の心臓がはち切れそうで、もしかしたら顔が真っ赤なりんどみただったかもしれないが意を決して、

「あ、あのね」

私の恋はまだ序章に過ぎない。

おわり